

自信喪失で弱気になった親

口で説くよりも、行ないで理解させることの方が大切ではありますが、口で説くことも事により、時によっては必要なことです。親の頭では、こんなことは当然わかっているだろうと思うことが、経験の乏しい子どもには理解できないことがよくあるものです。

それで、親はかんかんになって子どもの行為を怒っているのに、子どもの方は、親が何で怒っているのかさっぱりわからない、ということがよくあるのです。こういう意味では、世代の断絶はいつの世でもあったと思います。

しかし、今の世の中には、この世代の断絶が余りにもひどいように思われます。その理由は、今の親は、昔のように子どもを口やかましく説教することがないからだだと思います。

敗戦のショックと、新教育の到来とで、教育の基盤が失われ、従来のものに代る教育の新しい方針が立たず、従って無為に過ごしている、という例が多いのです。

また、このようにして自信を失って弱くなった親は、へたに叱って子どもに恨まれるよりも、物わかりの良い親として子どもに喜ばれる方がよい、と考えるようになったこともあるように思われます(ここに、スパルタ教育の復活を唱える理由、また、これに賛成する声が高まっている理由があります)。

しかし、これとは別に、幼児は未来に無限の可能性を秘めているものであるから、おとなの考えを一方向的に押しつけることは、幼児の成長を抑え、幼児を小さく固定してしまう恐れがあるのでいけない、と説く人がいます。そのために、幼児の自主性を尊重するという美名の下に、実は幼児を放任しているものが少なからずあります。

いずれにせよ、無為や放任は、人間が、その長い歴史の間に積み重ねて来た知恵を、軽視することであって、愚かな行為と言わなければなりません。

自己の経験から得た知識を伝えよう

人間が万物の霊長と言われ、他の動物と一線を画することができるのは、他の動物がその世代の経験を次の世代に伝える能力を持っておらず、従って、その貴重な知恵が一代限りで終り、蓄積されなかったのに対し、人間は、自己の経験から得た知恵を次の世代に伝えることができたために、代を重ねるごとに知恵が蓄積されていったからです。

この長い世代にわたって受け継いできた知恵を子どもに伝えなければ、子どもたちは、言わば原始の時代に生まれたのと同じことであり、零から出発することになるではありませんか。こんな愚かなことはないでしょう。

子どもの言うことや、することをよく見てみると、すべて何かの模倣であることがわかります。この模倣の能力にかけてはどの子どももすべて天才であって、どんなにへたな子どもでも、おとなよりはるかにすぐれているものです。

しかも、子どもは、模倣がうまいというだけではなく、模倣が好きで好きでたまらないのです。心から楽しんで模倣するのが子どもの天性だ、と言ってよいでしょう。それだからこそ少しの努力も払わずに、いろいろな能力を身につけることができるのだと思います。

たとえば、言葉などは、生後の三年間(と言っても、最初の一年間は、ほとんど無能に近い状態で学習しているのです)に、母国語の根幹となるものは、完全に身につけてしまいます。

これがおとなになったら、十年かかっても、とてもこれだけのことはできません。それは、学校の英語教育を思い出してみれば、すぐわかるはずです。

私たちは、今まで、この能力を当たり前(事実それが当たり前ですが)のこととして、だれ一人として驚いたものがいなかったのですが、よくよく考えてみますと、この能力というものは、驚くほど実に偉大な能力だということが出来ます(最初に、この言葉を習得する幼児の能力の偉大さに驚いた人は、今、ヴァイオリンの指導で名高い鈴木鎮一先生でしょう。先生は、今から半世紀近く前、この事実には驚いたことが、今世

界的に有名な鈴本式指導法を発見される動機になったということです)。

模倣から“創造”が生まれる

ところで、子どもたちは、模倣によって身につけたいろいろな能力や知識を、いろいろに組み合せて、新しいものを作り出します。だから、創造というのは、全くの“無”の状態から生まれ出るものではなくて、すでに存在するものを土台にして、これに工夫を加え、変化を加えることだ、と行うことができるでしょう。

だから「模倣のないところには、創造もない」と私は思っています。だから、幼児期には、できるだけ、今までの古い文化遺産に親しませ、これを模倣させておくことが、やがて、新しい創造発展をうながす原動力になるのだと思います。

そういう意味で、前回、職業の選択について、親代々の長い経験から得た知識をそのままそっくり次の世代に伝えることのできる“世

襲”というものを、もう一度考え直してみる価値があるのではないかと、言ったわけです。

くどいようですが、親の無為、放任からは決して創造的な子どもは生まれませんし、育ちはしません。親が真剣に子どもの教育に立ち向かう時は、たとえそれが間違っていたとしても、決して悪く反応することはないと思います。親の真心から出た教えというものは、正しいものは勿論ですが、誤ったものでも、子どもの心に暖かい励ましとして伝わり、益にこそなれ、害になることは決してないと信じています。

その意味では、古い教育も新しい教育もありません。親は自信をもって、わが子の教育に当たることが絶対に必要だ、と思います。